

まにふいくみやはか Fukapon

したいこと、してもいいから

したいこと、してもいいから

Fukapon

2012年2月5日 初版発行

発行所 まにふいくみやほか

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2012 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>

<http://www.projectkaigo.org/>

「私たちって、付き合ってるんだよね？」

「えっ？ うん、付き合ってるよね？」

「だよ、だよ」

「どうしたの？」

彼の視線が教科書とノートから、目の前の彼女へと移される。

「あの、さ……」

彼氏彼女、恋人同士。ローテーブルを挟んで並ぶ彼。少女は二人の関係を囁みしめてはにかむ——ようには見えなかった。

彼女は左手にあったシャーペンを机に置き、彼に正対する。

互いに背筋を伸ばし向かい合う様は、まさに初々しいカップルだ。

「どう言ったらいいかわからないから、ストレートに言うよ？」

「うん。それで、何を？」

エアコンの温風が、耳を隠すこともない彼女の髪を揺らした。

「別れよう、私たち」

「ええっと、ごめん。俺もどう言ったらいいかわからない……」

自分の部屋に來た彼女が、まさか別れ話を切り出そうとは。

彼に予測できようはずもない。年頃の男の子が、恋人の女の子を自室に招く。彼の頭の中は、実情と正反対を描いていたに違いない。

「そ、そうだよ、わからないよね」

青天の霹靂に返す言葉のない彼に向かい合ったまま、彼女は取り繕うように間を繋いでいる。

「あ、突然言われても困るよね。理由！ 別れたい理由、言おうか？」

さも核心を突いたと言わんばかりの彼女だったが、明らかに外

している。

彼が言葉を失っている原因は、そんなところがない。しかし彼には、己の胸中を表現するだけの余裕などない。

「あ、ああ、そうだな」

目を泳がせ、心ここにあらずの返事が精一杯だった。

彼女の方も余裕がないことは変わらない。

昨晚、たくさん練習した言い訳すら彼女には残っていない。発せられたのは、剥き出しの想いだけだ。

「純ちゃんが、好きなの」

剥き出しにもほどがある。いきなり実名人りで真相が明かされる。

強烈な告白に、彼の反応は一択だ。驚くほかない。

『「純ちゃん」って、中江純、^{なかえすみ}なのか？』

「うん」

「俺の妹の、純？」

「うん」

そう、驚くほかない。

ついには言葉を発することすらできない。

そんな彼とは対照的に、彼女は淡々と言葉を紡ぐ。

「ごめん。でも、隠したくなかったから。……もう、出て行くね」

テーブルの勉強道具を鞆に放り込んだ彼女は、スッと立ち上がった。

その凜とした姿を、彼は見たことがなかった。彼の知っている彼女は、こんなことを言う少女ではなかった。

「最後に、キスとかエッチとか、しとく？ いいよ、期待してたでしょ」

「べ、別に俺は……」

彼女は言い淀む彼に背中を向けて、本棚の奥に腕を突っ込む。

「隠さなくていいのに」

抑揚のない言葉とともに彼女の手から放たれたのは、趣味がわかりやすいアダルトビデオだ。

「私、縛られるの嫌いじゃないと思う。でも、バイバイ」

彼女は扉を開け、部屋を出た。

階段を下りる音は、彼の耳にも届いた。

リビングでは階上の惨事など知りようもなく、今日もいつも通り。

「やつほー、純ちゃんっ」

静けさを壊すのが彼女であるところも、全くいつも通りだ。

「翔子^{しょうこ}さん、いらしてたんですね。こんばんは」

「お邪魔してまーすっ」

——ポフッ

彼女、小牧翔子^{こまきしょうこ}はソファに飛び込み、純の隣を陣取る。

視線上、文庫本の上にくっとう首を出してきた翔子に、純は本を返して表紙を見せる。

「あ、このシリーズ、新刊出たんだ」

「はい。どうぞ」

本を譲られた翔子は、上体を起こしてパラパラとめくる。

同時に純は、翔子が退くのを予想していたかのようにソファから立ち上がった。

「コーラねー」

翔子の声を受けて、純は冷蔵庫を開ける。

コーラとオレンジジュース。彼女が来たときにだけ触れるペットボトル二本のうち、一本を抜き取った。

程なくしてグラスを乗せたお盆を持ってきた純に、翔子は告げる。

雰囲気も何もあったものではないが、彼女にとって大切なのは早さなのだ。

「今日は純ちゃんに大切なお知らせがあるの」

パタリと閉じた本の表紙が、今は心強い。

グラスがトンと置かれたのを合図に、彼女は本を胸に抱え、切り出した。

「今さっき、お兄ちゃんと別れて来ちゃった」

「えっ……？」

翔子の告白に、さすがの純も驚いたようだ。

反応を口にしてしまえばかりでなく、見開いた瞳も純にしては珍しい。

翔子とて彼女の異常に気付いていたが、止めどなく話してしま

う。

「私ね、他に好きな人ができちゃったの」

グラスを置いた姿勢のまま立ち尽くす純に、間を置くことなく続ける。

「純ちゃん、純ちゃんが好きなの」

翔子は真っ直ぐど真ん中に投げ込む。

対する純は、見事に——

「……？」

見送った。

突然だったこともあり、純は言葉の意味すらわかっていないの

あとがき

おはようございます。

その前に、ごめんなさいかな……。

過去最悪です。昨日の夕方から書き出しました。ごめんなさい、本当にごめんなさい。あちこちひどいことになってると思います……。とゆか、落ちないなー、この話。

来週の眼鏡時空も同様の展開決定。

スパッと落とすか、何とか出すかってのは、どうなんですかね。私の中では後者一択なんです、実は落とす方がよいのでしょうか。

うあー、暗い、暗過ぎる。明るい話しようぜ！ とは言っただけだと思いつかにゃーい。あ、そうそう、バレンタインデーだね。バレンタインデーと言えば締め切り……やめよう。

まだまだ頒布までは長いので、この辺で。
がんばれ私。

二〇十二年二月五日、日の出も近づきエアコンを入れようかという作業場より。

翔子が再び寒空の下で待っていると、今度はちょこちょこと生徒が下校していく。純のところだけでなく、多くの部活動が終了の時刻を迎えているのだろう。

（さすが中学生、髪黒いなあ。スカートも長いよね）

通り行く彼女たちを観察していたところ、ふと純が目の前に現れた。

「来た来た。帰ろっか」

「はい」

翔子が出した左手に、純は右手を重ねた。

「純ちゃんの手、冷たい」

「翔子さんの手が暖か過ぎるんです」

「やっぱり？ カイロ握ってたからねー。ほらっ」

翔子はいくっと純の手を引き寄せ、自分のコートのポケットに入れる。

「暖かいでしょ？」

「暖かいです」

少しやり過ぎたかなと翔子は思ったが、純の一言に安堵した。それどころか、びったりとくっついた彼女から、もう一言、発せられた。

「翔子さんの身体も、暖かいんですね」

「これから、そんな可愛いこと言っちゃダメだぞー。いろいろしたくなっちゃうから」

翔子の瞳に映るのは、多分に漏れず黒髪の伸びる頭だけ。しかし容易に想像できる純の表情に、彼女は謝らざるを得ない。

「ごめんね、そんなつもりじゃないってわかってるんだけど」

翔子の言葉を聞くや、純は手を解いて数歩先へと走り、振り返

る。

「私もわかってます、翔子さんがそういう人だって」

街灯に照らされた純の、顔が、太腿が白く眩しい。

翔子は彼女を見て、突然駆け寄った。

「慌てなくても逃げませんよ」

僅か数歩を飛んできた翔子に純が告げるも、彼女は行動を止めない。

翔子は勢いをそのまま下方に向け、純の目の前でしゃがみ込んだ。

そして、コートの裾を小さくめくる。

「っ！」

純の瞳が見開かれたとき、彼女の反応とは逆に、コートの裾は戻された。

「純ちゃん、スカート、どうしたの？」

「あ、着てくるのを忘れた。だから寒かったんですね」

「もっと慌てなさいよ！」

翔子が見上げると、いつも通りの純が見えた。

「純ちゃんって実は、天然さんなのね」

苦笑いをする翔子に純が返したのは、きつとわからない言葉。

「翔子さんはやっぱり、優しいんですね」

やはり彼女が不思議そうな顔をした虚を突いて、再び走り出す。

「私のパンツ、見たいでしょう？」

すぐに追ってくる足音を聞いて、純はコートの裾も気にせず、思い切り走った。

だろう。そこで翔子は、言い方を変えた。

「小牧翔子は、中江純が好きです」

「……え？ 私？」

「うん、純ちゃんだよ」

今度は理解しようだ。言葉の真意まで、しっかりと。

しかし意味がわかろうとわからないことはある。彼女はお盆を持ち直して、翔子に聞き返した。

「あの、えっと……、私、どうしたらいいですか？」

純は確かに、驚いているのだろう。しかし声は平然とし、顔色も変わらない。

翔子は目の前の彼女を見て、改めて思ったことを伝える。

「恋人同士、して欲しいな」

そして立ち上がり視線を合わせると、まだわからないことがあろう彼女に教えた。

「この本の二人みたいに、ね？」

抱いていた本を彼女に掲げる。

女の子二人が、優しく見つめ合っている。

「その通り、するんですか？」

ついぞ赤く染まる頬に、翔子は唇をあてた。

「——しちゃった」

離れた顔を見つめ合うと、互いに意外な顔をしていて二人から笑みがこぼれる。

「あーもうっ、純ちゃん可愛いよおーっ」

やっぱり無言でいる純に、きゃあきゃあと騒ぐ翔子。

対照的な二人は今も変わっていない。

再び収まったソファの上での距離だって、今まで通り。

「ヒロインの二人みたいに、ゆっくり、仲良くなるう？」

翔子がかくてんと首を倒すと、純の肩に乗っかる。

「はい」

彼女がこくと頷くのを感じながら、翔子は早速「ゆっくり」を始めた。

「まずはもっと近づこう！ てことで、抱きついてみるー」

彼女はソファの弾力を利用してガバツと抱きついた。

真横から左腕でトップバストを、右腕で肩胛骨を経由させても、翔子の腕はまだ余るほどの体格差。がっしり抱きしめられては動きようもない。

しかし、純はあっさりと翔子を引き剥がす。

「邪魔です」

「ええええっ！」

彼女の冷え切った一言に、翔子は派手に仰け反り、演技か本気か涙目だ。

「ななななんんで？ 私のこと嫌い？」

一方の純は座る位置を直し、翔子に俯きがちの顔を向けた。

「だ、だって、立ち上がれないじゃないですか」

「そんなに私といたくないの？」

「御夕飯、作りたいんです」

「あ、なるほど」

翔子は納得すると、ほっと胸をなで下ろして、うるうるしていた瞳を袖で拭く。

その様を見て純は、ポケットからスッとハンカチを出した。

「こんなことで泣かないでください……」

「ありがと。でも、『こんなこと』じゃないよ。好きな人には嫌

われたくないの！」

「私はそう簡単に人を嫌ったりしません。好きにもなりませんけど」

「えー、好きになってよーっ」

翔子はソファの上で鳶座りをして、両手をぶんぶん振っている。純はもちろん、意に介さず腰を浮かせた。

「じゃあ、御夕飯作りますね。——きゃ、痛っ！」

しかし、悲鳴とともにまたソファに戻ってしまふ。

「……自分の髪に、手をつけてしまいました」

「解説いらないって。純ちゃん、やっぱり可愛いっ！」

翔子はまたもや、純に抱きついた。

†

翌日の放課後、翔子が急ぎ向かった先は言うまでもない。

「帰宅部の大勝利ね」

我が身の幸運を口にしながら、辿り着いたのは中学校前。

すでに放課の時間からだいぶ経ったようで、校門を出てくる生徒はあまりいない。帰宅部はその活動を終えており、多くの部活は未だ活動中と言ったところだろう。

後者の一員である純を待つべくやってきた彼女だが、寒空の下である。

（寒い……。そだ、中に入っちゃおうかな。制服、似てるしね！）

早々に計画を変更して、校門をくぐった。

（うーんと、被服室はどこかしら。こっちなあ）

中学校に案内板などあるはずもなく、何となくで教室を探す。

その言葉を聞きつけたわけではないだろうが、一人の生徒が彼女の方にやってきた。

「あの、済みません。お願いがあるんですけど……」

「何？」

翔子の口調は今日も気さくだったが、さすがに初対面。目の前の少女は改まった姿勢のまま、お願いを口にする。

「試着に協力していただけませんか。背の高い人、私たちの中にはいないので」

「喜んで。どんな服なの？」

「うーん、見てもらうのが早いと思います」

少女に連れられ、純を含む数人が待つ一角へ。

同時に室内で繋がった隣の部屋から、衣装を持った生徒が現れた。

「魔法少女だそうですよ。ウエスト67センチですけど、大丈夫ですよね？」

「言わないと、ダメ？」

翔子はちらっと純に視線を送る。

自己申告がないなら測らんとする生徒がメジャーを構える中、純からの答えも似たようなものだった。

「はい。サイズが合わなければ着せられません」

「冷たいなあ。67ならびつたりだよ、鯖読みなしで」

「ありがとうございます。じゃあ服を脱いでいただけますか」

相手は中学生とは言え、毎日服を作っている子たちだ。

翔子が服を脱ぐと、手際よく採寸し服を着せた。あっという間にできあがったのが、魔法少女の翔子ちゃんである。

「胸のサイズだけはあってないんですが……。どうですか？」

幸か不幸かすれ違う生徒はない。

階段を一度上がり、廊下を折れること二度、偶然にもあっさり和被服室を見つけることができた。

「ふっふっふっ、クールな純ちゃんも驚くに違いない」

改めて「被服室」の表示を確認すると、にやつく表情はそのままにガバッと扉を開く。

「純ちゃん、迎えに来たよーっ！」

翔子は大声の挨拶とともに室内へ突入。

中の状況を確認すると果たして彼女はいたが――

「誰っ!？」

「鍵かけなかったの？」

「へ、変質者？」

室内の空気は予想外だった。

それもそのはず。やはり穏やかでない視線を送る純は、いつになく露出度高めだ。

「あー、えっと、純ちゃん、べったんこだよねー。ははっ」

「はあ……。とりあえずその辺座っててください」

「え？ いいの？ わーい、じゃあこの辺で」

深い溜息とともに許された在室が、歓迎されたものでなくても翔子は気にしない。嬉々として近場の席に着いた。

周囲からの「あれ誰？」という問いにどう答えたのか、翔子の耳には届かなかった。しかし程なくして部活動が再開されたところを見るに、穏当な答えを返したのだろう。

「彼女って言ってもらえる日、来るのかなあ」

演劇の衣装だろうか、如何にもお姫様なドレスを着せられる純を見ながら、翔子は独りごちる。

「びつたり。悔しいけどウエストはちょっとキツイ。太ったのかなあ……」

雰囲気飲まれるとはこのことで、翔子もすっかり、真摯に問いに答えていた。

「服の方がキツめに作ってあるんです。ウエスト締めて、胸を出す衣装ですから」

「なるほどね」

風変わりな服を着た翔子は、くるりと回ったり、いくつかポーズを取ったりしている。

「コスプレやる人の気持ち、何となくわかるかも」

「それなら、もう少しやってみます？ お姫様とのキスシーンがクライマックスですよ」

「うあー、ベタだねえ」

「でも、受けるんですよ。自分で言うのも何ですが、年頃の女の子ですから」

説明してくれた彼女は、さーっと台本をめくり、該当の箇所を指差して翔子に渡した。

翔子は科白を確認しながら、すでに「やりません」という顔をしている純に問うた。

「純ちゃん、やる？」

「遠慮しておきます。翔子さんはキスしたいんでしょうけど」

答えは案の定の拒否に加えて、冷たいお言葉付きだった。

取り付く島もなさそうで、翔子は肩を竦め、わざとらしい溜息をついた。

「あーあ、残念だなあ。キスしなかったなあ」